

# 琉球大学学術リポジトリ

「世界のウチナンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（6）－「ウチナンチュ」の越境的な移動の経験差と沖縄社会への対応－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 領域性, ネットワーク, 沖縄, 世界のウチナンチュ大会 キーワード (En): 作成者: 鋤塚, 賢太郎, Kuwatsuka, Kentaro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002010137">https://doi.org/10.24564/0002010137</a>

## 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (6) —「ウチナーンチュ」の越境的な移動の経験差と沖縄社会への対応—

鍛塚 賢太郎

- I. はじめに
- II. データ作成と出生地・居住地の把握
- III. 国別にみた出生地・居住地の特徴と移動の経路
- IV. 州・県別にみた出生地・居住地の特徴と移動の経路
  1. ハワイ, カリフォルニア, サンパウロから参加した「沖縄系」の人びとの特徴
  2. 「沖縄系」の人びとの移動の経路
- V. 「沖縄系」の人びとの空間的な移動のタイプと沖縄社会
- VI. おわりに

**キーワード**：領域性，ネットワーク，沖縄，世界のウチナーンチュ大会

### I. はじめに

世界各地の「沖縄社会」について，沖縄島での生活経験をもつ移民・移住者に対してこれまで多くの関心が注がれてきた。それは沖縄島とは異なる場所において，いかなるかたちで「沖縄社会」が形成されていくのかを，歴史的な過程も視野に入れながら描いてきた。とはいえ，沖縄島からの集団的な人の移動が活発化しておよそ 100 年という時間的な経過は，沖縄島以外の場所で生まれ沖縄島での生活経験を持たない人びとを確実に増加させていく。

こうした文脈のなか，世界各地の「沖縄社会」と沖縄島の沖縄社会との間にある文化的・社会的，あるいは経済的な関係性は，どのように変化しているのか。また世界各地に居住する「ウチナーンチュ」，すなわち自らのルーツに「沖縄」の存在を意識する「沖縄系」の人びとは，「1 世」や「2 世」がつくりあげてきた「沖縄社会」とそれが存在する場所に今後とも定住し続けるだろうか。一次的な「離散」によって生まれた海外の「沖縄社会」は，さらに「離散」を重ねていくのだろうか。

こうした状況を捉えていくためには，世界各地の「沖縄社会」を，それが所在する「地域」やその社会の構成員の「世代」といった準拠枠だけでなく，移民社会の構成員がもつ空間的な移動の経験＝経路といった側面からも捉えていく必要がある。本稿では，こうした問題意識のもと，2006 年 10 月に沖縄島で開催された「第 4 回世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査で得られたデータに基づきながら，参加者の空間的な移動経路の特徴

について検討し、「沖縄系」の人びとの現時点での「離散」の状況について把握することを目的としている。

具体的には、当該アンケート調査で把握できた回答者の出生地と居住地との関係から、経験的に空間的な移動のタイプ（類型）を見いだす。そして、当該大会参加者が、どのようなタイプの移動を経験したのか、さらに本大会への参加が多かった地域の人びとが、どのような移動を経験した人びとによって構成されているのかを明らかにする。もちろん、本稿で考察できる範囲は「世界のウチナーンチュ大会」参加者に限られる。また、移動の経路についても出生地と現在の居住地の2地点間の把握にとどまる。そのため、例えば石川（1986）や辻本（1998）が示しているように沖縄戦後に沖縄島からポリビアに移住し、そこからブラジルやアルゼンチン、さらに日本などへ移動を繰り返していった人びとの移動経路を把握できるわけではない。

とはいえ、国よりも小さな空間スケールを単位とし、かつエスニシティという観点から多数の国に跨る人の移動の全体像を量的に捉えることが困難な現状において、本調査より得られたデータは、「沖縄系」と自己認識する人びとに限定されているものの、こうした課題に迫り得るものであり、その資料的な価値は小さくない。

## II. データ作成と出生地・居住地の把握

「第4回世界のウチナーンチュ大会」参加者に対して行ったアンケート調査<sup>1)</sup>には、回答者の出生地と現在の居住地とを、国名および州・県名という2つの空間スケールで把握する質問を設定していた。本稿では、この設問に対する回答に基づいて上記の課題にアプローチする。

その際、記入内容を類推することによって出生地や居住地のデータを新たに追加したり、地名の表記を統一（正規化）したりした後に、集計を行った。回収した調査票によっては州名や県名もしくは都市名などしか記入していない回答や、地名の表記が回答者によって異なるものが存在したためである。具体的には、現在の居住州・県しか記入がなく居住国についてのそれがない場合、例えば居住地について「ハワイ」としか記入されていない場合、居住国を「合衆国」と類推し新たにデータとして追加した。また、現在の居住国についてアメリカ合衆国と類推できるものでも、「U S」、「U S A」、「America」、「US-Hawaii」というように表記に「ゆれ」があるため地名を統一した。なお、国名については空間的な移動を把握するという本稿の目的を考慮し、現在の領域に基づいて集計した。

こうした手順を経て作成したデータに関して、自身を「沖縄系」とすると自己認識する回答者<sup>2)</sup>について、出生地と現在の居住地について把握できた割合（把握率）は、国別にみると前者99.7%、後者99.3%であり、極めて高い割合を示す。また、州・県といった国よりも小さな空間スケールを単位として出生地および居住地の把握率をみてみると、い

ずれも 90%前後の比率を示す。

このように、本データは回答者のライフヒストリーの出発点と、現在における生活の拠点という 2 地点間の関係について、国別の集計よりも相対的に解像度の高い州・県といったレベルから、国境をも含みこんで量的に把握することができる。国境を越えた人の移動を国別でしか把握できないことが多いなか、それよりも小さな空間スケールを単位として人の移動経路を量的に把握できるところに本データの特徴がある。

### Ⅲ. 国別にみた出生地・居住地の特徴と移動の経路

「第 4 回世界のウチナーンチュ大会」は、アメリカ合衆国で生まれ現在もアメリカ合衆国に居住する人びとが最も多く参加する大会であった。これは、「沖縄系」と自己を認識する人びとでも、また「沖縄系」以外の参加者でも同様であった。

まずアンケート回答者の出生国をみると、合衆国を出生地とするものが全体の 49.7%を、「沖縄系」に限っても合衆国が 50.0%を占める<sup>3)</sup>。また、合衆国を現在の居住国とするものが回答者全体で 64.0%、「沖縄系」で 62.8%と最も高い。ただし、出生国に占める合衆国の割合と居住国のそれとを比較してみると、後者の方が 14.3 ポイントも高い値を示す。また「沖縄系」についてみても、合衆国を居住国とする方が、出生国とする方よりも 12.8 ポイントも高い<sup>4)</sup>。居住地が変化しない大会参加者がいる一方で、国境を越えた移動経験をもつ参加者が存在する。

出生国と居住国とが一致しない回答者の比率をみると、回答者全体では 26.5%、「沖縄系」でも 25.8%を占め、少なくとも四分の一は国境を越えて移動している。彼/彼女達は、どの国からどの国へと移動した経験をもつのであろうか。図 1 は出生国および居住国の双方を把握できた「沖縄系」と自己認識する回答者 585 人について、その関係をまとめたものである。合衆国に生まれ現在も合衆国に居住する回答者は、合衆国に居住する回答者の 76.9%を占める。このように出生地と居住地とが同じ回答者は、ブラジル (73.9%)、カナダ (73.2%) などでも多い。ただし日本を出生国とし、それ以外を現在の居住国とするものが 129 人おり、なかでも合衆国を居住国とするものが 71 人と最も多く、次いでブラジル 18 人、カナダ 11 人と続く<sup>5)</sup>。

日本を出生国とするものについて世代別にみると、やはり「沖縄系 1 世」と回答したものが 129 人中 102 人 (79.0%) と最も多い。しかしながら、日本を出生国としながら「2 世」もしくは「3 世」と 24 人が回答しており、その多くが合衆国に居住する。国境を越えた移動の経験は、「1 世」に限定されるものではない。

加えて、日本以外の国で出生した「沖縄系」の人びとのなかで現在日本に居住している人びとも本大会に参加していた。具体的には、合衆国、ブラジル、ペルー、カナダ、アルゼンチン、その他 (メキシコ) のいずれかで出生し日本に居住する回答者が 22 人いた<sup>6)</sup>。

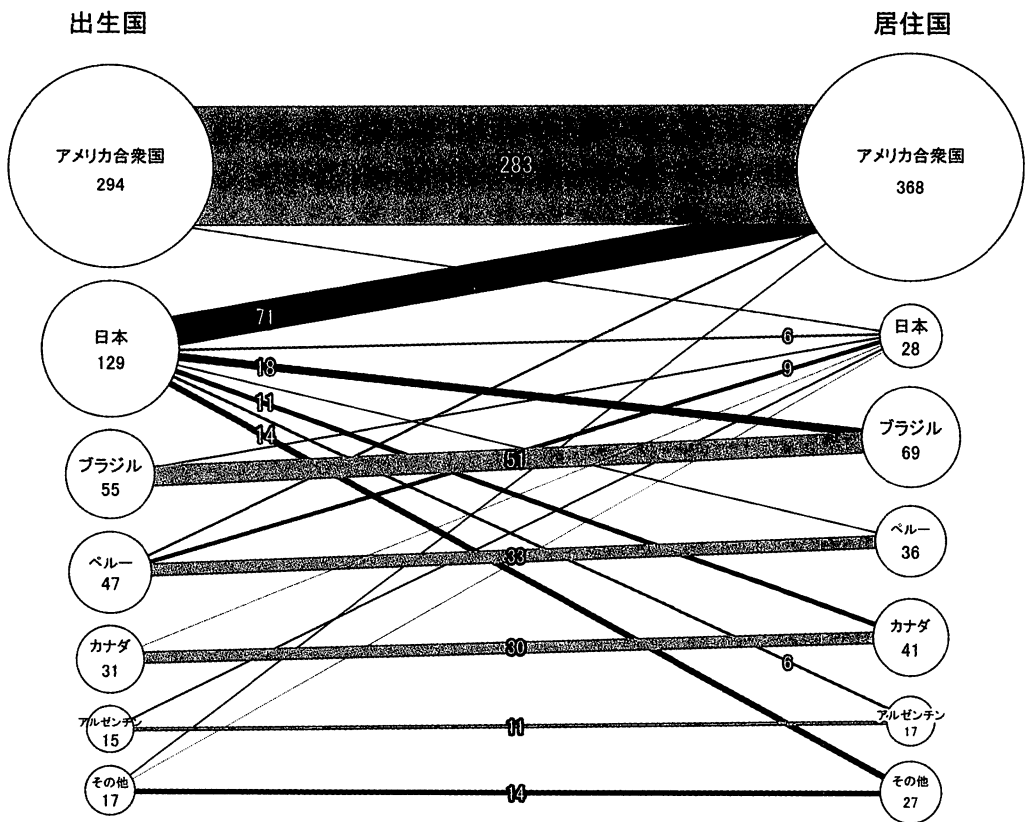


図1 沖縄系の「第4回世界のウチナーンチュ大会」参加者の出生国と居住国との関係  
資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査より作成。

またペルーもしくはその他の国（フィリピン、北マリアナ連邦）のいずれかで出生し合衆国に居住するものも8人いた。その一方、日本および合衆国以外の国について、こうした関係は認められず、特に地理的に近く言語的に共通性のある南米の国々の間での移動は把握できなかった。

以上のように国を単位としてみると、圧倒的に出生国と居住国とが同一の大会参加者が多い一方で、出生国と居住国とが異なっており必然的に国境を越えた移動を経験した人びとも存在することが確認できた。ただし、その移動先は限定的なものであった。

#### IV. 州・県別にみた出生地・居住地の特徴と移動の経路

##### 1. ハワイ、カリフォルニア、サンパウロから参加した「沖縄系」の人びとの特徴

州・県といった空間スケールでみた場合、アンケートに回答した大会参加者のうちアメリカ合衆国ハワイ州を出生地もしくは居住地とする人びとが多く、その割合は「沖縄系」

の人数に限定するとより高くなる。本大会の性格を知る上で、ハワイからの参加者の持つ影響力を無視しえないことがうかがえる。

具体的には、ハワイ州を出生地とするものが回答者全体の 40.4% を占め最も高い比率を示す。「沖縄系」の人数に限ってみても、ハワイ州が 46.3% と最も高い比率を示し、これは大会参加者全体でみた場合よりも 5.9 ポイントも高い。次いで沖縄県 (21.9%)、サンパウロ州 (8.9%)、リマ県 (5.2%)、アルバータ州 (4.1%)、カリフォルニア州 (3.7%) と続く<sup>7)</sup> (表 1)。

この傾向はアンケート回答者の現在の居住地からみた場合でも同様である。大会参加者全体をみた場合、ハワイを現在の居住地とするものの比率が最も高く、全体の 39.3% を占める。「沖縄系」に限ってみても現在の居住地をハワイ州とするものが「沖縄系」の回答

表 1 出生地域別にみた大会アンケート回答者

地 域 名	回答者全体		「沖縄系」	
	度数	%	度数	%
ハワイ	287	40.4	250	46.3
沖縄県	155	21.8	118	21.9
サンパウロ	55	7.7	48	8.9
カリフォルニア	37	5.2	20	3.7
リマ	32	4.5	28	5.2
アルバータ	28	3.9	22	4.1
ブエノスアイレス	13	1.8	12	2.2
ブリティッシュコロンビア	7	1.0	5	0.9
テキサス	6	0.8	1	0.2
ニューヨーク	6	0.8	—	—
メキシコシティ	5	0.7	4	0.7
大阪府	5	0.7	3	0.6
ペンシルヴェニア	4	0.6	1	0.2
マトグロッソドスル	4	0.6	4	0.7
オンタリオ	3	0.4	2	0.4
ミシガン	3	0.4	—	—
ミズリー	3	0.4	—	—
サンタクルスデラセラ	2	0.3	2	0.4
ラフベントウド島	2	0.3	2	0.4
リオデジャネイロ	2	0.3	2	0.4
東京都	2	0.3	2	0.4
その他	49	6.9	14	2.6
合 計	710	100.0	540	100.0

注：ここでの「沖縄系」とは設問について、選択肢 1 もしくは選択肢 2 を選んだもの。「沖縄系」が 2 名以上の地域について表示した。詳しくは本文注 2) を参照。

資料：「第 4 回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査より作成。

表2 居住地地域別にみた大会アンケート回答者

地域名	回答者全体		「沖縄系」	
	度数	%	度数	%
ハワイ	277	39.3	227	42.7
カリフォルニア	92	13.0	67	12.6
サンパウロ	59	8.4	57	10.7
アルバータ	36	5.1	28	5.3
沖縄県	25	3.5	13	2.4
リマ	21	3.0	19	3.6
ノースカロライナ	12	1.7	7	1.3
フロリダ	12	1.7	4	0.8
プエノスアイレス	11	1.6	11	2.1
テキサス	9	1.3	3	0.6
ブリティッシュコロンビア	9	1.3	6	1.1
ヴァージニア	8	1.1	3	0.6
イリノイ	7	1.0	4	0.8
オンタリオ	7	1.0	6	1.1
グアム	7	1.0	5	0.9
ワシントン	6	0.9	5	0.9
ニューヨーク	5	0.7	2	0.4
ノルトライン=ヴェストファーレン	5	0.7	2	0.4
マトグロソドスル	5	0.7	3	0.6
マニラ	5	0.7	5	0.9
神奈川県	5	0.7	4	0.8
リオデジャネイロ	4	0.6	4	0.8
サンタクルスデラセラ	3	0.4	3	0.6
群馬県	3	0.4	3	0.6
その他	72	10.2	41	7.7
合計	705	100.0	532	100.0

注：ここでの「沖縄系」とは設問について、選択肢1もしくは選択肢2を選んだもの。「沖縄系」が3名以上の地域について表示した。詳しくは本文注2)を参照。

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査より作成。

者全体の42.7%を占め、次いでカリフォルニア州(12.6%)、サンパウロ州(10.7%)、アルバータ州(5.3%)、リマ県(3.6%)、沖縄県(2.4%)と続く(表2)。

このように、アンケート回答者のうち「沖縄系」の人びとについてみると、沖縄県以外の地域、特にハワイ州で出生した人びとが多く参加するものであり、その存在は、「第4回世界のウチナーンチュ大会」の意義を考える上で小さくない<sup>8)</sup>。では現在の居住地、つまり参加地域の違いによって移動の経路に相違はみられるだろうか。こうした点を検討するに先だって、まず大きな存在感を示すハワイ州からの参加者は他の地域の参加者と比較してどのような特徴を持っているのかを、ハワイ州に次いで参加者の多かったカリフォルニア州やサンパウロ州との比較を通じて確認しておく。

「世界のウチナンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (6)  
 —「ウチナンチュ」の越境的な移動の経験差と沖縄社会への対応— (鍛塚賢太郎)

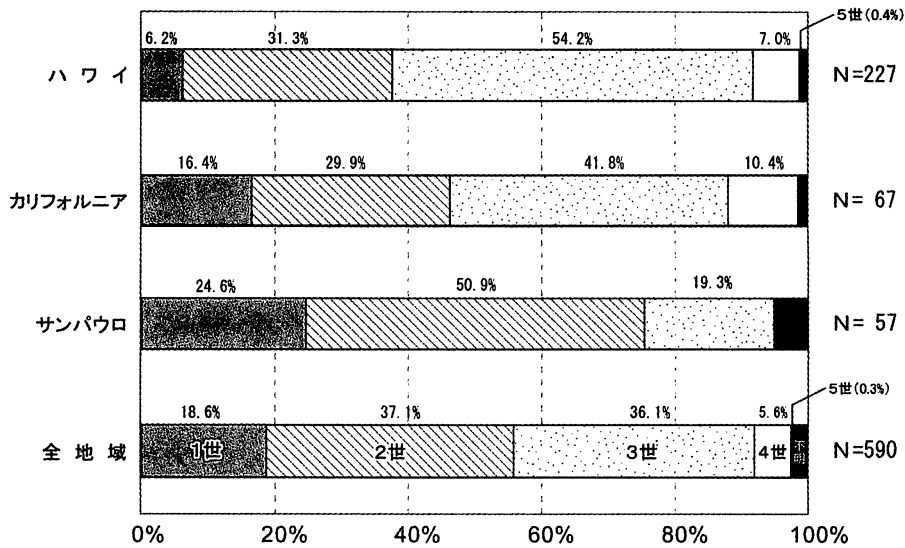


図2 居住州別に見た「沖縄系」の世代認識

資料：「第4回 世界のウチナンチュ大会」アンケート調査より作成。

まず回答者の世代認識という点についてみると、全体では「2世」や「3世」の占める割合が高く、地域別にみると特にハワイ州とカリフォルニア州については「3世」の占める割合が高かった（図2）。ハワイ州からの参加者の5割強は「3世」で占められており、また日本語の能力も相対的に高いとは言えない<sup>9)</sup>。その一方で、ブラジルのサンパウロ州を居住地とする回答者では「1世」や「2世」の占める割合が高かった。ハワイ州やカリフォルニア州からは「沖縄系」の「2世」、「3世」が多数参加する一方、沖縄県で生まれブラジルに移住した「1世」がサンパウロ州から本大会に多数参加しており、世代特性が地域で異なっている<sup>10)</sup>。

## 2. 「沖縄系」の人びとの移動の経路

回答者の「移動の経路」という点からみた場合、各地域にどのような特徴を見いだせるだろうか。州・県といった空間スケールでみた場合、アンケートに回答した「沖縄系」と自己認識する人びとの場合、出生地については32、居住地については57の地域を把握できた。回答者全体では出生地と居住地とで地域数の差が小さい一方で、「沖縄系」では現在の居住地の数が出生地を大きく上回っている。このことから、「沖縄系」の人びとが出生地を離れ多様な地域に広がって居住している様子がうかがえる。

ただし出生地と居住地とを結ぶ移動経路について、ハワイ州、カリフォルニア州、サンパウロ州それぞれを見てみると、その特徴は異なる。ハワイ州（23人、10.1%）および



サンパウロ州（16人，28.1%）では出生地と居住地とが異なる回答者の比率が低い一方で，カリフォルニア州（53人，79.1%）では出生地と居住地とが異なる回答者の比率が高い。移動経路という点で合衆国内でもハワイ州とカリフォルニア州とでは異なる特徴を示す。さらに注意深くみても，カリフォルニア州を現在の居住地とする人びとのなかで，ハワイ州を出生地とする人びとが多いことに気づく。現在カリフォルニアに在住する67人のうち，カリフォルニア州を出生地とする回答者を，ハワイ州を出生地とする回答者が大きく上回る。特にハワイ州を出生地として現在カリフォルニア州に居住する回答者は，「2世」（12人），「3世」（20人）が中心となっている。

このように州・県といった空間スケールから地域別にみた場合，圧倒的にハワイ州を出生地とし現在もハワイに居住する回答者が多く，その中核を担うのが「沖縄系」の「2世」，「3世」と自己認識する人びとであった。とはいえ，ハワイで生まれた「沖縄系」の「2世」，「3世」の人びとがカリフォルニア州へと移動している例もあるように，移動という点でカリフォルニア州は出生地が異なる人びとが多く参加していた。地域間で移動経路を比較した場合，移動の経験に差があることがわかる。

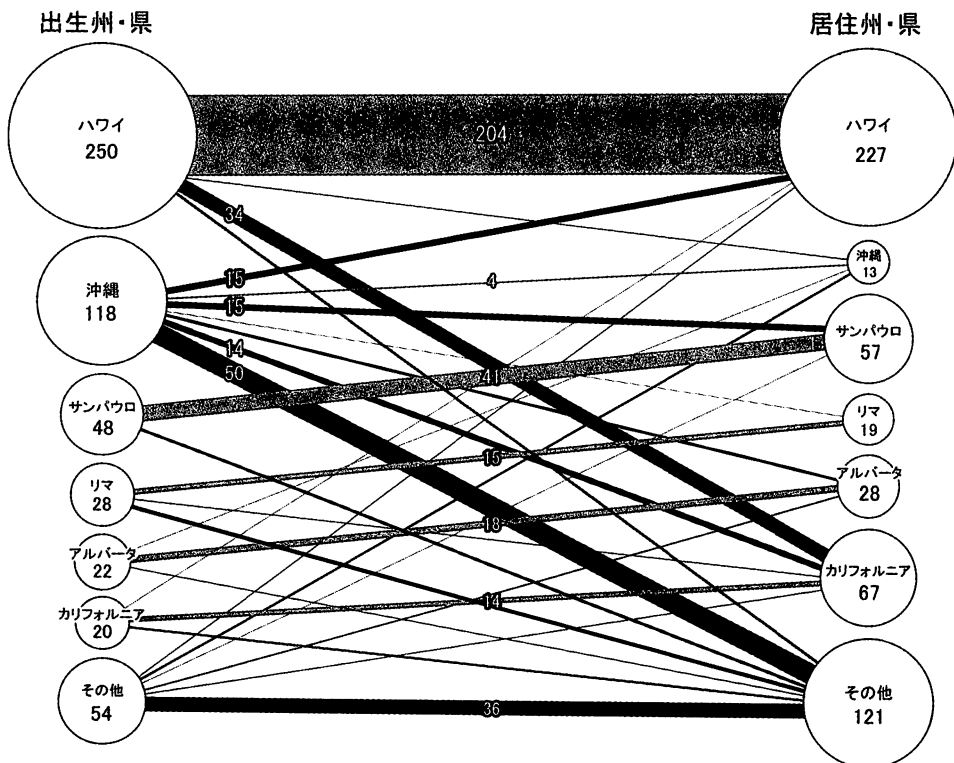


図3 沖縄系の「第4回世界のウチナーンチュ大会」参加者の出生州・県と居住地・県との関係  
資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査より作成。

## V. 「沖縄系」の人びとの空間的な移動のタイプと沖縄社会

州・県レベルの空間スケールから出生地と居住地との関係を捉えると、「沖縄系」の人びとの空間的な移動の経路は次の4つのタイプに分類できる(図4)。第1は「定住型」で、出生地と居住地とが一致する人にあてはまる。第2は「国内移動型」で、国という空間的なレベルで出生地と居住地とが同じでも、州・県というレベルでそれぞれが異なる人が該当する。また、出生地と居住地とで国が異なる人に該当する越境型の移動もある。ただし、ここには「沖縄系」の人びとのルーツとなる「沖縄県」を出生地とする場合と、それ以外の地域を出生地とする場合とが含まれる。ここでは前者を第3のタイプとして「初越境型」、後者を第四のタイプとして「再越境型」と名付ける。

具体的に、4つのタイプをアンケート調査のデータに基づいてみると、第1の定住型が最も多く「沖縄系」の回答者の54.2%を占める。次いで、沖縄県を出生地とする初越境型(18.3%)、国内移動型(11.0%)、再越境型(3.9%)と続く<sup>11)</sup>(表3)。

表3 移動のタイプからみた「沖縄系」の大会参加者

	定住型	国内移動型	初越境型	再越境型	不明	合計
度数	320	65	107	24	74	590
比率	54.2%	11.0%	18.1%	4.1%	12.5%	100.0%

注：ここでの沖縄系とはアンケート調査票の設問2について、選択肢1もしくは選択肢2を選んだもの。詳しくは本文注2)を参照。

資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査より作成。

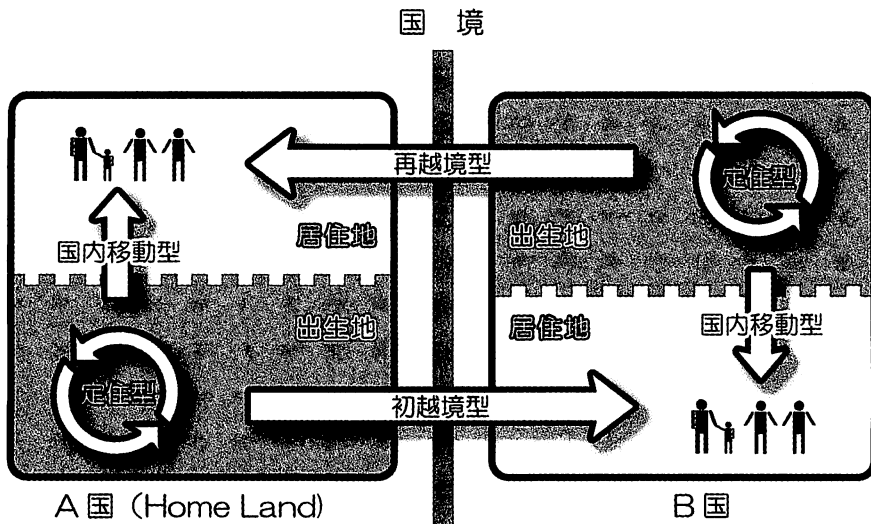


図4 出生地を基準とした空間的な移動のタイプ

注：図中の矢印は人の移動量を示すものではない。著者原図。

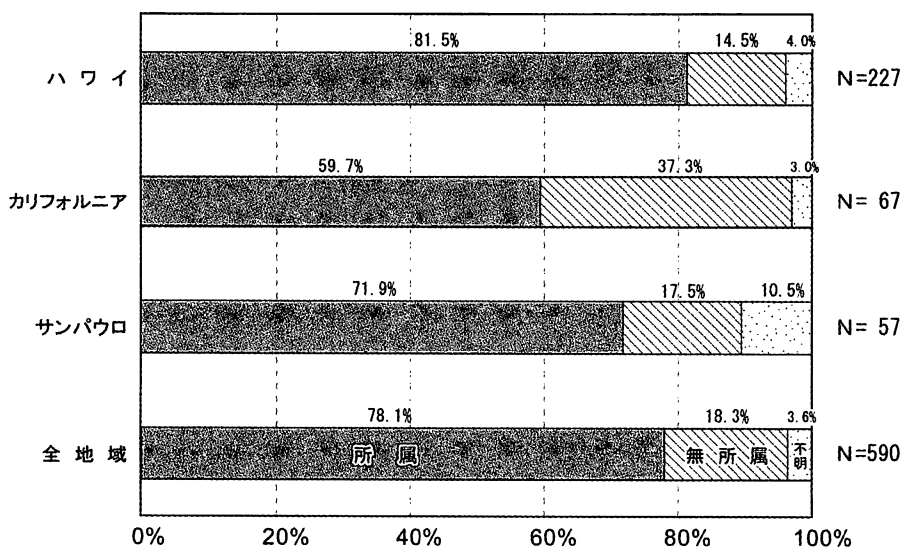


図5 居住州別に見た「沖縄系」の人びとの県人会への所属状況  
資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査より作成。

本大会で最大の参加者数を誇ったハワイ州は第1の定住型に当てはまる回答者が多い。これに対してカリフォルニア州に居住する「沖縄系」の人びとを特徴づけるのは、第2の国内移動型にあてはまるものの存在である。両地域とも「沖縄系」の「2世」および「3世」が中心となって本大会に参加しているにもかかわらず、出生地と居住地という2地点間の移動から見た場合、空間的な移動の経験が異なっている。

こうした移動経路の相違の他に、両地域には沖縄県人会やそれを支える「沖縄社会」に対する態度にも違いがある。沖縄県人会への所属状況を問うた、本アンケート調査の設問5<sup>12)</sup>について、ハワイ州では「沖縄系」の参加者の約8割が県人会に所属しているのに対し、カリフォルニア州では約6割にとどまる<sup>13)</sup> (図5)。しかも、カリフォルニア州において県人会に所属する人の半数はハワイ州を出生地とする。

また、県人会活動の次世代への継承について問うた設問17<sup>14)</sup>に関して、「うまくいっている」および「どちらかという、うまくいっている」とする回答がハワイ州ではあわせて7割を超えるのに対し、カリフォルニア州では5割程度にとどまる。特に設問17の選択肢について、「わからない」とする回答はハワイ州では5.3%しかないのに対し、カリフォルニア州では31.3%と大きな比率を占める<sup>15)</sup> (図6)。

このような結果から、ハワイ州に居住する回答者にとって県人会の活動は身近なものであり、その内容について判断するに足る多くの情報に接する機会が豊富であることがわかる。これに対して、カリフォルニア州に居住する回答者の場合、こうした機会に乏しく

「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (6)  
 —「ウチナーンチュ」の越境的な移動の経験差と沖縄社会への対応— (鍛塚賢太郎)

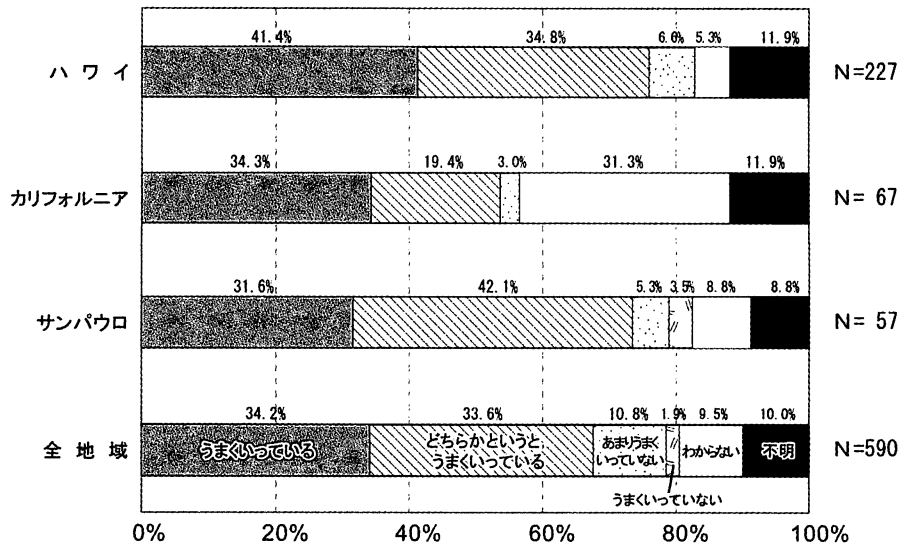


図6 「沖縄系」の人びとの県人会活動の次世代への継承に対する認識  
 資料：「第4回 世界のウチナーンチュ大会」アンケート調査より作成。

県人会の活動に疎遠な人びとがハワイと比較して多いことがうかがえる。ただし後者の状況は、県人会組織とは距離をおく一方で「世界のウチナーンチュ大会」に関心を寄せる人びとの比率の高さを示すものとも解釈でき、カリフォルニア州の「沖縄系」の人びとの大会への参加が、県人会という組織を通じたものだけではない様子を見てとれる。

このように、ハワイ州では県人会の活動に求心力があり、それとの関係のもとに会員の大会への参加がはかられているのに対して、カリフォルニア州の参加者は県人会との関わりが相対的に薄いなかでも大会への参加がはかられていることが示唆される。つまり、ハワイ州の場合、「沖縄系」の人びとの大会への参加は沖縄県人会の活動のなかに埋め込まれているのに対して、カリフォルニア州の場合そうした埋め込みから離脱したかたちで行われているように見える。

本アンケート調査に基づくならば、生まれ故郷という点で異なるバックグラウンドを有するカリフォルニア州の「沖縄系」の人びととハワイ州の人びととは、「沖縄社会」を制度的に束ねていく県人会という組織に対する個々人の態度に相違があることを指摘できよう<sup>16)</sup>。このような地域間での態度の違いは、長い移民の歴史のなかで沖縄系の人びとが、そのルーツとなる沖縄島から次第に離れ「世代」を重ねていくという時間的な文脈で生じるものなのであろうか。それとも、島嶼かつ遠隔地というハワイの地理的な特徴や、ロサンゼルスやサンフランシスコといった大都市があり経済的な中心性を有するカリフォルニア州の地理的な特徴によって生じるものなのであろうか。少なくとも、「沖縄系」

の人びとの越境的なネットワークの形成について考えていく上で、こうした地域間で生じている時間的・空間的な文脈の相違と、それを背景として個々人が選び取る生き方の違いを認識しておく必要があるだろう。

## VI. おわりに

本稿では、出生地と居住地との関係から見いだせる空間的な移動の経路に着目しながら「第4回世界のウチナーンチュ大会」に参加した「沖縄系」の人びとの地域的な特徴と、「沖縄社会」に対する態度の地域的な相違について検討してきた。

空間的な移動の特徴を4つのタイプに整理してみると、ハワイ州のように定住型に特徴づけられる移動形態を示した地域がある一方で、カリフォルニア州は国内移動型の特徴を示した。また、沖縄を出生地として世界各地に居住する人びと、ハワイ州を出生地としてハワイ州以外の合衆国に居住する人びと、さらに南米を出生地としながら国境を越えて移動したアメリカ合衆国や日本に居住する人びとの存在も見いだした。つまり「沖縄系」の人びとの移動の経路から本大会を捉えた場合、沖縄島の沖縄社会と世界各地の「沖縄社会」との関係だけでなく、沖縄島以外の「沖縄社会」を相互に結びつける可能性を潜在的に持つ人びとも存在する。

こうした移動経路の相違は、現在居住する地域を拠点として活動している沖縄県人会、もしくは「沖縄社会」に対する「思い入れ」や現在居住する「場所に対する感覚」のあり方に対して少なからぬ影響をおよぼしているのかもしれない。本大会への参加者をみるかぎり、ハワイ州では「沖縄系」の人びとと沖縄県人会との関係は密接であり、「沖縄社会」に埋め込まれたかたちで「沖縄系」の人びとが本大会に参加していると解釈できた。これに対して空間的な移動の経験を有する人の割合が高かったカリフォルニア州の場合、現地の「沖縄社会」とは疎遠なかたちで本大会に参加している人もいた。

さらなる検討が必要ではあるものの、本研究で把握できた移動経路の相違が当該地域の「沖縄社会」にもたらすものを考えていくうえで、それぞれの「沖縄社会」が位置づく地域の特徴を見逃すことはできないだろう。観光地でもあるハワイ州は合衆国のなかでは地理的にも大都市から遠隔地にあり、経済的にも周辺的な地域としての特徴を持つ一方、カリフォルニア州はロサンゼルスやサンフランシスコという経済的な中心性をもち世界中から人びとを惹きつける大都市圏（メトロポリス）がある。

こうした地理のもとに人々のリアルな日常生活が埋め込まれているならば、世界に広がる様々な「沖縄系」の人びとによる越境的な関係構築、つまり「ウチナーンチュ」の国境を越えたネットワークの展開を捉えるためには、世界各地の「沖縄社会」がたどってきた時間的文脈だけでなく、それぞれの「沖縄社会」が位置づく地域的な文脈の相違にも十分に注意を払うことが重要であろう。それは世界各地に展開してきた「沖縄社会」の領域性

だけでなく、その脱・領域性を、時間的かつ空間的な文脈のなかで複合的かつ重層的に理解していくことでもあろう。

## 注

- 1) アンケート調査票を4カ国語(日本語, 英語, スペイン語, ポルトガル語)で作成し, それらを1つに綴じたものを一部として海外からの参加者を対象に約5,500部配布し764部回収した。アンケート調査の目的については金城(2008)を, 調査・集計方法については鍛塚(2008)を参照。
- 2) 設問は, 「あなたは沖縄系移民何世ですか? 当てはまるものひとつを選んで○をつけてください。」というもので, 選択肢は「(1)移民\_\_世(数字をお書きください) (2)世代がわからない (3)沖縄系ではない (4)その他」の4つである。ここでは, 選択肢(1)および(2)を選んだ回答者を, 「沖縄系」としている。
- 3) 表2中の「北マリアナ連邦」はかつて日本の委任統治領であった旧南洋群島のサイパン島やテニアン島などが該当する。
- 4) これに対して, 日本では居住国の占める割合が17.2ポイントも低下する。
- 5) 日本から合衆国へ移動した経験をもつのは女性が多い。
- 6) 日本について県別にみても, 沖縄県に居住するものが13人と最も多く, 次いで神奈川県(4人), 群馬県(3人), 千葉県(2人)と続く。その特徴は, 「沖縄系」の「2世」もしくは「3世」と認識する20代から30代の女性という点である。
- 7) 「第4回世界のウチナーンチュ大会」への参加者について県人会別に集計した大会事務局の資料によると, ハワイ州に拠点を置く県人会からあわせて1,101人の参加があり最も多い。アメリカ合衆国内では次いでカリフォルニア州に所在する3つの県人会(北カリフォルニア沖縄県人会, サンディエゴ沖縄県人会, サクラメント沖縄県人会)から, あわせて204名が参加している。
- 8) 現在アメリカ合衆国に居住する回答者(386人)のうち, ハワイ州に居住する人びと(287人)の占める比率は74.4%であり, 「沖縄系」に限ってみるとこの比率は10.6ポイントも高く85.0%という値を示す。
- 9) 野入(2008)も指摘しているように, ハワイ州からの参加者の日本語能力は相対的に高くない。アンケート調査の設問6の日本語の能力を問う設問について, 「(1)全くできない。もしくはあいさつ程度。」あるいは「(2)日常の会話を聞き取れるが, 話すことができない。」のいずれかを選択した人の割合は, ハワイ州とカリフォルニア州でいずれも約70%を占めるのに対して, サンパウロ州では約25%にとどまる。居住地と日本語能力とのクロス集計についての検定結果は,  $\chi^2(8, N=351)=53.565, p<0.5$ 。
- 10) 世界のウチナーンチュ大会実行委員会(第1回)『世界のウチナーンチュ大会<報告

書』によると、1990年に開催された第1回の「世界のウチナーンチュ大会」では世代でみると「2世」(891人)の参加者が最も多く、次いで「1世」(735人)、「3世」(658人)が続く。また、ブラジル(788人)からの参加者が最も多く、次いでペルー(471人)、ハワイ(386人)が続く。参加者の特性からみて、大会の性格が大きく変化していることがわかる。

- 11) なお、「再越境型」には鹿児島県を出生地として北米を居住地とする「沖縄系」の人が1名含まれる。
- 12) 調査票の設問5は「あなたの所属している県人会の名称を書いてください。」というものであり、選択肢は「(1) \_\_\_\_\_に所属している。」と「(2) 県人会には所属していない。」との2つある。
- 13) 居住地と県人会との所属状況との検定結果は、 $\chi^2(4, N=351) = 21.986, p < 0.5$ 。
- 14) 調査票の設問17では、「移民一世の高齢化がすすんでいます、あなたが住んでいる国(地域)の沖縄県人会の活動において、次世代への継承はどうなっていると思いますか? ひとつ選んで○をつけてください。」というもので、選択肢は「(1) うまくいっている」、「(2) どちらかという、うまくいっている」、「(3) あまりうまくいっていない」、「(4) うまくいっていない」、「(5) わからない」の5つである。図中の「不明」とは無回答のもの。
- 15) 居住地と県会所属状況との検定結果は、 $\chi^2(10, N=351) = 51.563, p < 0.5$ 。
- 16) ハワイ州の沖縄県人会組織を束ねる「ハワイ沖縄連合会」の会員数は1万人と大規模であるのに対し、カリフォルニア州に拠点を置く沖縄県人会(サクラメント沖縄県人会、北米沖縄県人会、北カリフォルニア沖縄県人会)の会員世帯数はおよそ700世帯、1世帯あたり3人として約2,100人程度である。本大会事務局の資料にもとづくならば両州の県人会からの大会参加者数は、ハワイ州から1,101名、カリフォルニア州から204名であり、県会会員数に対する参加率は前者が約11%、後者が約7%となる。なお、この数字は県会を通じて大会事務局が受け付けた参加者数であり、旅行社を通して受け付けた合衆国からの参加者数(429名)は含まれていない。県会を通さずに参加登録を行った人びとを、「沖縄社会」のなかでどのように位置づけていくのが今後の大会運営の課題であろう。

## 文献

- 石川友紀. 1986. 「ボリビア国コロニアオキナワ移民の再移住に関する実証的考察」、『沖縄地理』, 1: 53-64.
- 金城宏幸. 2008. 「『世界のウチナーンチュ大会』と沖縄県系人ネットワーク(1) —沖縄社会へのインパクト—」、『移民研究』(琉球大学移民研究センター) 4: 83-96.

- 鉦塚賢太郎. 2008. 『世界のウチナーンチュ大会』と沖縄県系人ネットワーク (3) —テクニカルノート: アンケート調査の方法とデータベース化—, 『移民研究』(琉球大学移民研究センター) 4 : 117-132.
- 辻本昌弘. 1998. 「文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程: 南米日系移住地から日本への移民労働者の事例研究」, 『社会心理学研究』14-1 : 1-11.
- 野入直美. 2008. 『世界のウチナーンチュ大会』と沖縄県系人ネットワーク (2) —課題に残された次世代の担い手育成: アンケート調査結果から—, 『移民研究』(琉球大学移民研究センター) 4 : 97-116.

(くわつか けんたろう・琉球大学移民研究センター准教授・人文地理学)

## **The Worldwide Uchinanchu Festival and Okinawan Network (6): Geographical Experiences of Uchinanchu's Migrations between the Birthplace and the Place of Residence**

**Kentaro KUWATSUKA**

University of the Ryukyus

**Keywords:** Territoriality, Networks, Okinawa, Worldwide Uchinanchu Festival

In the questionnaire survey concerning the fourth Worldwide Uchinanchu Festival; TAIKAI, Oct. 2006, the research group set the questions for the respondents about their birthplace and the current place of residence. In this paper, current situation of the Okinawan diaspora and their relations with “Okinawa society” will be illustrated based on the results.

The people who were born and currently live in the USA are the largest group of participants in the TAIKAI. There are, however, a quarter of Okinawan participants who did not share the same birthplace and residential place by country. In other words, they have a different experience of trans-border migration.

We can recognize four types of migration from the results. The first type is the settled migration which attributed the participants to the same place between birth and residence. 54.2% of the Okinawan are assigned to this type of migration. The second type is the (domestic) internal migration, where they have only experienced moving between regions within national boundary, and the



percentage is 11.0%. The third type is the maiden trans-border migration. This type is comprised of the people who were born in Okinawa but live outside Japan and this makes up 18.1%. The last type is the repeating trans-border migration. Okinawan descendants (4.1%) who were born and live outside Okinawa Prefecture fall in this group. An example of this is the third generation Okinawan descendants who were born in Buenos Aires, Argentina, and live currently in Shizuoka, Japan.

Regarding the migration types, Hawai'i and São Paulo are ascribed to the first type (settled migration) and California is characterized as the second type (internal migration). The participants from Hawai'i and California share similar features from the results of this survey, especially in terms of generation, Japanese language ability, percentage of women participants, and occupations. However, there is an apparent difference of migration type between the regions within the USA.

The difference of migration types between Hawai'i and California reveals the attitude toward "Kenjin-kai" (Okinawan association) which is supported by Okinawan communities in the region. Results from the questions, although the 81.5% of participants from Hawai'i have affiliated with the Kenjin-kai, the participants from California make up only 59.7% and half of them identified Hawai'i as the birthplaces. As the same time, 76.2% of the respondents from Hawai'i regarded the Kenjin-kai works were passing on to next generations as going "very well" or "somewhat well". Only a half of the respondents from California consider it positively. It is more important that 31.3% of the respondents from California are not aware of the activities launched by the Kenjin-kai, compared with Hawai'i of only 5.3%. These findings imply that the Okinawan in California, through migration, have detached themselves and kept the social distance from Kenjin-kai.

From the standpoint of the migration type, one can assume Okinawan communities in California are not characterized as homogeneous as Hawai'i. It makes suggestions that these features will be reflected in the sense of the places in which embedded the experience of migrations.